

## 愛すべきドン・ファン, ピーター・ウォルシュ

——『ダロウェイ夫人』の心理学的考察 (その2) ——

伊藤 太郎

### Peter Walsh as a lovable “Don Juan”

—— A Psychological Study on *Mrs. Dalloway* (Part 2) ——

Taro ITO

前稿に於いて Virginia Woolf の *Mrs. Dalloway* (1925年発表) を取上げ、主人公の Clarissa Dalloway の人物像に焦点を当てて心理学的考察を行ない、中年女性に特徴的な「女性らしさの病い」や「空の巣」症状を論じた<sup>1)</sup>。本稿に於いては、同作品に登場しているもうひとりの主要人物、Peter Walsh を組上に載せて、中年男性の抱えるモラトリアムの問題、内なる異性の統合の問題などを、ドン・ファン的人物像の性格分析の視点から考察してみたいと思う。前稿で論じた Clarissa Dalloway の場合は、女性的な水々しい魅力と性格で人々の信頼と敬愛を集めた存在であったが、同時に「人生」の hostess 役としての己の社会的使命を成就するためには、我が身を燃やして殉死をしてもよいという激しい気概と透徹した意志を持った、いわば男性的要素も多分に兼ね備えた女性であった。それに反して Peter Walsh の場合は、未だ一人前の男性であるとは言い難い欠陥性、病理性が目につく。万年青年のような若々しい容貌と燃えるような情熱、それに自在な行動力のために、女性を魅了してやまぬ存在でもあるものだが、同時に緊迫した人間関係や厳しい現実状況を前にして逡巡とする逃避傾向、「永遠の少年」のような退却衝動、抑えがたい女性依存欲求などを指摘しない訳にはいかない。男性性の歪みを内包しながらも、思う存分女性を愛して気儘な人生を歩んできた彼は、さしずめ現在のドン・ファンと呼ぶに相応しい。過去、イギリス文学に於ては George Gordon, Lord Byron (1788—1824) の偽善を暴く大諷刺詩 *Don Juan* (1819, '21, '23, '24) が殊に有名であるが、V. Woolf の創作人物像としてはこの Peter Walsh が唯一珍しくドン・ファンの特徴を示すのだ。Peter のドン・ファンぶりを検証しながら、彼の抱える心理的問題及び存在意義などを考えてみたい<sup>2)</sup>。

#### I

Peter Walsh は「愛すべき人物」(118) である。Lady Bruton の催した午餐会で、彼が5年ぶりにインドから帰国し今ロンドンに居ることが話題に上ると、Bruton 夫人, Richard Dalloway, Sir Hugh Whitbread の3人が3人共、「気持ちの良い罪人」(197) である彼のことを懐かしく想い出し、心和むのである。今でも語り草となる程の恋愛騒動を起し、Clarissa に拒絶された失恋の痛手で全てを台無しにして放棄し、インドに逃走して向うで遮二無二働き大冒険もするが、結局成功できずにおめおめと戻って来て今失業中の、好人物の Peter だからである。ドン・ファンの破滅人生は周囲の人々の羨望や嘲笑を誘い、又一種の安心感を与えるものらしいこ

とは、昔も今も変わらない。人はこの手の人物には優越感が半ば入り混じった安堵の念を覚えるのだ。ドン・ファンの性格特性を(1)貴族性、(2)好色性、(3)道化性と仮に定義付けて、順番に見ていきたいと思う。

先ず Peter Walsh の持つ貴族的な性格特性、高等遊民的な雰囲気から考えてみよう。彼は決して高貴な家柄という訳ではない。家系については「3代にわたってインド大陸の諸事を運営してきた、尊敬すべき在印イギリス人家庭に生まれた」(61)と記述されているだけだ。しかし、今も彼が誇りを持つ程の立派な父親であったこと、Oxford 大学留学もさせてもらっていることから、経済的苦労とは無縁の資産家の息子であったことは推測できる。しかも彼の上品な物腰や洗練された立ち振舞いは、生まれながらの育ちの良さ窺わせるに充分である。悠然と彼が独りレストランで夕食をとる場面が全てを物語る。彼が何気なくメニューを見る様子や、特別なワインを指でさして注文する様子、テーブルに体をくっつけがつつではないが本気で食事に向かう様子、或いは控え目だが決然としたウェイターとの口のきき方等々、店に居合わせた人々の感嘆を呼ばずにはおかないことが逆に皮肉られる程に強調されている。身に付けた優雅さは食事の際に遺憾なく発揮される。「この上なく心おきなくて、その快活さと育ちの良さのために、一緒に居るとうっとりするわ」(172)と Clarissa さえも内心賞賛するのである。

外面的な身のこなしの上品さだけではない。育ちの良さは gentleman 然とした、鷹揚と構える人生態度にも通じる。Peter は肩を怒らせて立身出世に奔走した訳ではなく、適当に体裁の良い仕事をこなして、何とかうまく人生を送ってきた。現世的価値で身を固める規範性は皆無で、社会や人生を見くびってはいないけど、期待過剰でもない—良く言えば心の余裕があるために、適当に世間に関わり、適当にその場その場を取り繕ってきたようである。表裏のない強さだけを前面に出す男性とは違い、意外と女性的な内面世界を持っていて、「特に髪が白くなりかけている今でも、彼が満足した顔付きで、何か隠し立てをしている様子をしているのは奇妙だった」(171)のだ。一見、超然としていて余裕を感じさせるのだが、彼が一旦恋に燃えたと、分別の欠片もない若い娘に簡単に手玉に取られて翻弄される所が、又、如何にも世間擦れをしていない初な精神的処女性を窺わせる次第である。上品な物腰と翳りのある気高さが、Peter の貴族性をもたらす魅力であると言えようか。

しかし、育ちの良さに通じる慎しみ深さや「完全に男性的とは言い切れない」(172)所は、母性本能をくすぐる魅力となっている反面で、対人関係に於ける引込み思案や、退却神経症的な現実回避性の裏返しの出出でもある場合が多い。なにしろ Peter 自ら、現実には、「決然と立ち向うことが出来ない」(174)という優柔不断さを告白している。「いつも物事をあちこちからぐるぐる眺めてしまう」(174)という傍観者の態度は、もし厭世的なものでなければ、やはり現実世界での自信の無さを証明する逃避傾向であると言わざるを得ないだろう。Peter が「変人で、精霊のような存在で、普通の男とはまるで違う」(208-209)という印象を人に与えるのは、彼が社会的自我で確固たる自己防御膜を張り巡らすことが未だ出来ないからである。女性でありながら社会的自我を確立し、パーティを切り盛りする完璧な社交婦人としての名声を築き上げている Clarissa とは正しく対照的な存在である。「この年になって家庭も持たず、行く所がどこにもない」(209)から、家庭人としての機能を放棄して夫や父親の役目を降りているし、現に今は失業中の身であるから職業社会人としての社会的機能も一時棚上げにしている。己の分を悟り、一人前の大人としての自覚に目覚め、人生や社会を受容する確たる心的態度も含めてペルソナと言うのなら、Peter のペルソナは明らかに未熟なままである。帰属感の希薄さは彼の高等遊民性に由来するのである。

そもそも Peter の経歴自体が、彼の高等遊民ぶりを示唆している。Oxford 大学を放逐されたこと、一時期社会主義者となったこと、そしてある意味での社会的失敗者となったこと (56) が明かされているのである。具体的内容の記述が無いこと (作者が簡単な言及に留めたこと) を殊更大袈裟に取り上げるのは本末転倒の恐れがないでもないが、しかし何が原因であるか明確にされていないにしても、退学処分を受け、社会主義に傾倒した若き日の Peter は、独善性、革新性、観念性を特徴とする精神的貴族のモラトリウムに、どっぷりに漬っていたはずなのだ。在学中より社会運動にのめり込んだ活動闘士でないことだけは予想がつくから、学問自体に深い幻滅を抱いたか、何らかの大失態を演じたか、或は失恋騒動で身の処し方に窮したかも知れない。とにかく退学の理由はどうでもよいのである。可能性として一番考えられるのは、「気分変化が激しい」(79) という躁うつ傾向や、移り気で何事も長続きしない「性格上の欠陥」(119) のためらしいのだが、要は以後中年になっても彼がそのモラトリウム性から脱却できずにいて、それが育ちの良さを感じさせる何か中性的な慎しみ深さに映るのである。

Peter は同時に、女性にもてるだけの才能と感性を備えた有為の若者でもあった。たとえ現実社会では、「名を成すことが出来るような非常に有能な人物であるのに、そうならなかった」(197) 失意の落伍者ではあるのだが、彼の内に秘めた優れた資質だけは十分に認められてよい。彼の豊かな教養や知性が、彼の漂わず貴族性を十分に請け合う。作品中で、社会的自我の要請とも無縁なまま、既成価値にも惑わされずに、己の純粋な視座で人間や人生の本質を見据える能力を身につけているのは Peter 唯一人と言えるが、それはモラトリウム性が逆に彼に保障してくれた道化役としての資格にもなっているのである。Peter は「魅力的で、頭が良くて、全てのことに自分の意見を持っていた」(140) し、又、「抽象的な主義を愛し、わざわざロンドンからヒマラヤ山系の山まで本を送らせた」(57) 程の本好きの勉強家であった。特に文学には造詣が深く、Clarissa に分らないことがあると助け舟を出したり本を貸してくれたりしたのも常に Peter であった。彼は彼なりに若い時から自分の才能や感性には随分自信と自惚れを持っていたのであるが、結局は、持続する意志力が欠如した飽っぼい性格のために、それらを最大限活かせる学問や創作の道を (自ら望んだ中途放棄でなかったかも知れぬが) 安易に断念し、最も不似合いな実業の世界に乗出す羽目になるのだ。所詮、社会主義に傾注したり文学愛好に走ったのも、モラトリウム青年の一時的熱中行為の域を出なかったということだろうか。逆説的に言えば、遊びや趣味の領域では「人生の大部分は人工的に作り上げた慰みごと」(61) とする高等遊民としての彼の本領が発揮されるのだが、個人としての曖昧さが許されない、逡巡とした優柔不断さや現実認識の甘さが命取りとなりかねない厳しい実社会では、彼が失敗者の烙印を押されるのも当然すぎる結末と言えよう。

自分の内面世界にプライドを持つ高等遊民としての Peter の気位の高さは、彼の人間関係に特徴的な影を落とす。確かに、彼はクラブの談話室に頻繁に出入りをして、男同士でゴルフやブリッジをして大いに楽しみはするが、それはあくまでも彼の貴族性を満足させる社交活動の初対面レベルの浅い交際に限られる。一步踏み込んだ個と個の深いレベルの人間関係は、特に相手が男性の場合は不得手のようだ。プライドばかりが高く、女性的な感受性が強くて傷つきやすい質であるから、同性の男性に対しては、むしろ秘めた敵対意識を抱いて回避的になってしまうのである。Peter に男の親友が一人としていなくて、彼の理解者が女性たちばかりというのは、注目に値する事実であって、これは次章で述べる好色性と大いに関連がある。

## II

次に Peter の移り気な好色性について考えてみたい。好色とは言っても、彼は淫乱な性倒錯者でも異常性欲者でもない。「いつも女性のことで問題を起こしている」(197) という意味で、無類の女好きなのだ。女にだらしがらないのである。Clarissa に言わせると「俗っぽくて、くだらない、平凡な女たちばかり」(140) と恋愛沙汰を起こしているのだが、女性への執着ぶりは、男性に対して回避行動を見せることと誠に対照的である。Peter にとって恋愛こそ「世界で一番重要なこと」(134) なのだ。彼が取分け好きなものは「女性の社会、女性との交友のこまやかさ、それに恋をしている女性たちの忠実さ、大胆さ、偉大さ」(174) なのである。例えば、Clarissa との大失恋騒動の後、インド行きの船の上で知り合った女性と早速恋に陥り、すぐに衝動的結婚をしてしまう。それを皮切りに何度も恋愛事件を引き起こしたらしくて、彼の節操の無さは有名になってしまったのである。相も変わらぬ気取ったいで立ちで5年ぶりに皆の前に姿を見せた今回も、やはり、二人の子持ちだがまだたった24才の黒髪のインドの官能美人 (Daisy) と恋愛中である。そもそも今度の帰国は、彼女との結婚をロンドンの弁護士と相談するためでもある訳で、この年になって「まだあの怪物 (=恋愛感情) に吸いつかれていますは！」(50) と Clarissa は呆れ果ててしまう程だ。

彼が寝ても覚めても、内に外に、絶えず女性を意識しているという極端な描き方なのだ。「インドから帰った後だったので、出会う女性に恋をしてしまった。彼女たちは新鮮だった」(79) と釈明をするものの、解放感を満喫する軽躁状態の中、女性にばかり目移りがしてしまう事実は否定しがたい。Clarissa 訪問を終えて宿泊のホテルに帰る途中、例えば、若い堂々として魅力的な娘に運命的な出会いを感じて後をつける。娘の一挙手一投足に勝手な意味付けをして、自分に気があると思いつく手口なのだ。相手の顔の表情や仕草に、自分への特別の合図を読み取って空想の中で無言の会話を勝手に交わすのは、関係妄想を疑ってしまう程の執着さだと言えよう。「僕は想像を逞ましゅうして、ちょっと気晴しをしなくちゃ」(60) と陽気を装って弁解すればする程、自己満足の貧しい空想に賭けようとする強迫性が露呈される。とにかく、単なる一時的な「気晴らし」と称して、街を歩きながら、魅力的な若い女性にばかり目をやるのである。可愛らしい女を見ると幸福感を感じ、薄汚ない女性を見ると気分が滅入るといった気分変調を告白するあたりは、面喰いの軽薄さと同時に、主体性の無い女性依存心理まで感じられる。女性の容貌やスタイルだけではない。化粧や服装が変化したことなども含めて、周囲の女性たちを細々と観察して印象を蓄積していく。そしてそれらが連綿とした連想を呼ぶ契機となって、過去に彼が関わりを持った女性たちのことが思い出されてくるという構図なのだ。

Peter のドン・ファンたる所以は、熱しやすく冷めやすい対女性関係にある。本能的に、感情の赴くままに女性を愛したいという生命交歓の欲求は人一倍強いのだが、すぐに相手の女性に飽きてしまう。特に最近「50才を過ぎると人を欲しがらなくなる」(99) 性欲減退のためか、何事も長続きしない意志力の欠如とも相俟って、一時的な、一方的な慰め事の色合いが濃くなっている。実は Daisy との一件も、彼女が人目を憚らず「あたくし、あなたが欲しいとおっしゃるもの全てを差し上げてよ」(72) と一途に思いを募らせて追いかけて来るようになるにつれて、うんざり気味の疎ましさを感じ始めているのだ。征服の歓びは元来長続きしないものだ。「女の無言の献身にも至極簡単に飽きぐるし、それに恋愛に変化を求めがちである」(175) という Peter の言葉には、女性遍歴の不毛さを自ら反省する心情すら窺える。しかし、である。

「猛禽のように」(174)、空中から格好の獲物を探し出して容赦なく襲いかかり、満腹してひとり自己満足していた若い頃の攻撃性や積極性は影を潜めたとは言え、飽きてもなおやはり、次の獲物を見つけるべく女漁りをしないではいられない彼の視線に病的なものを感じるのである。プレイボーイを装う仮面の下に、彼をそうした強迫行為に駆り立てる病理性を感じるのである。

女性にだらしがなく、いつも女の後ばかりを追いかけている破滅型のドン・ファンの性格者には、自己愛の補償を絶えず女性に求めていると存在不安に陥る母子癒着タイプの男性が多いのである。この手の男にとっては、女に認められ、女に褒められ、女に愛されることが、何よりも慰めとなり、即生き甲斐にまでなってしまう。先に触れた Peter の慎しみ深さや近寄り難い雰囲気も、実は、無意識の自己防衛本能が要請する、女性を誘き寄せせるための、精一杯取繕った健気な外向きの顔である、と断定するのは酷に過ぎるであろうか。女性的なものに絶えず神経を集中させ、魅力を感じた女性にはすぐに目移りして物欲しげな視線を向けるのは、愛情飢餓以外には考えられない。ある意味で、彼は男性社会では認知されない、社会的落伍者の烙印を押された存在である。うっとりする程の健康な肉体を持っている反面で実に感傷的で、女々しいところが随分とある。「インドの英国人社会で破滅したのも、この感受性のためだった」(167) のだ。現実社会でのその自信喪失を癒すために、退行傾向を示して、女性の中に母なる女神を求めてしまうのだ。相手の女性が Daisy のように、逆上せ上がって追いつがってくると、本質で未熟な男性性ではとても応じきれなくなって破綻を来すのであろう。「旅、騎馬旅行、喧嘩、冒険、ブリッジ・パーティー、情事、それに仕事、仕事、仕事！」(49) と、彼が自分の気儘な放蕩人生を誇示して、いくら活動的な男性的要素を強調しても、社会同一性や性同一性が未熟なままの幼児的ナルシストの姿が、逆に浮彫りになってしまうのである。モラトリアム性を引きずり、幻想的、誇大的な自己評価から未だ脱却できずにいるところが、彼を悲劇の（同時に喜劇の）主人公に仕立てているのである。

Peter の母親についての具体的記述は一切ないのだが、ナルシストとしての彼には確かに母親コンプレックスが見え隠れするのだ。彼が善しにつけ悪しきにつけ母性的アニマに如何に憑かれているかは、見知らぬ老乳母の傍の公園のベンチで、微睡みの中で見る夢の内容から推察できる。黄昏の森の中に迷い込んだ孤独な旅人 (Peter) を待ち構えているのは、妖しい女の姿となって次々と現われてくる森の精たちである。森が暗闇の無意識世界を、さらに母性的子宮空間を意味し、森の精が未分化な great mother の手の者たちであることは言うまでもない。それらの精たちは「育てる母親」、「呑み込む母親」の両面の属性を付与され、旅人に果物を盛った大きな豊穡の角を差し出して休息を勧める幻となったり、甘い歌声で航海者を魅了して海の中へと誘う siren のような幻となったり、波間に溺れている水夫の目の前へ浮び上がってきて、思わず水夫が抱きつこうとする蒼ざめた顔のような幻となったり、荒海から立ち現れて「同情や理解や浄め」を撒散らす慈愛のヴィーナスのような大きな幻となったり、変幻自在なのである。そして「しばしば孤独の旅人を圧倒し、彼から現実界に戻りたいという欲求を取り上げて、その代償として普遍的な平和、つまり死を供給する」(64) ののである。母性的アニマとの合体欲求が強すぎると、破滅衝動に駆られて死の抱擁へと向うこともあり得る訳だが、Peter の場合は多分にその傾向があるものの、完全にその段階までは退行していない。

その母性的アニマ像を担わされて、Peter の精神的な身元保証人になっているのが Clarissa ということになる。彼女に対しては、まるで母親と両価的共生関係にあるため類神経症を呈している成熟不安の若者の様に、執拗なまでの幼児的甘え（依存欲求）と、受け容れられない恨みによる攻撃性を、同時に露に示すのだ。そもそも Clarissa とは昔も今も「お互いの心に何の

努力もせずに入出りできる」(70) 関係であり、彼女ほど「彼を理解し、彼と共感する者は誰一人いなかった」(51) ののである。二人はよく二階建てバスに乗ってロンドン探検をしたことがあったが、その際空中を飛ぶような錯覚の中で、二人一緒にペルソナの殻を脱出する無名性の歓びに浸って、互いの自我境界が消失した融合世界に居るような恍惚感を満喫したことがよくあった。その神秘的な幻想体験が、Peter にとっては女性と真の時間を共有した貴重な記憶となっていていつまでも蘇るのである。Clarissa こそが、Peter が精神的な一体感を感じて身体中の神経を震わせた唯一の相手だったのだ。「彼女は彼のこれまでの生涯で誰よりも大きな影響を与えた」(169) 存在だった。しかし、Peter が彼女を性愛の対象として愛し始める時に二人の精神愛は破局が避けられなくなる。肉体的性愛は Clarissa にとっては、魂の不可侵の尊厳を一方的に犯す恐怖以外の何物でもないからである。

Clarissa への愛情欲求が拒絶されたこの失恋は、他方 Peter にとっては大きな意味を持つ。単に心底愛した女性に受け容れられなかったという心の痛みだけでは済まない自暴自棄の混乱ぶりを彼が示すのである。幼児が母親に拒絶された時のパニックのような醜態で、自我の確立した一人前の大人の失恋体験としてはお粗末すぎるのだ。結局、Peter は無意識にも Clarissa に母性的アニマ像を重ねて、母親代わりの精神的庇護やエロス交流と、男女の性愛関係を同時に彼女に要求していたことになる。正しくそれは、Clarissa に言わせれば「途方もないこと」、「不可能なこと」(71) だったのだ。このすさまじい破局の場面は、自己存在を根底から否定されたという悲しみ、無念さを脳裏に焼き付ける悪夢として、母親と同様、代理母にも拒絶されたという二重の心傷体験として、後々の彼の不毛な女性遍歴を運命付けることになる。

「Clarissa が僕の内部の何かを、恒久的に絞り取ってしまった」(174) という逆恨みを抱くのも、「彼女が僕の人生を台無しにした。生涯に二度と、人を愛することが出来なくなった」(211) と未練がましい心情を未だ吐露するのも、如何に Clarissa の存在が大きいかを物語る。Peter にとっては、Clarissa との失恋体験をどのように癒すかが、つまり、内なる異性の統合の問題とも重なって、今後非常に大きな課題となるのである。

### III

最後にドン・ファンとしての Peter Walsh の喜劇的道化性について触れ、彼の存在意義を考えておきたい。彼がドタバタ喜劇の主人公よろしく、その単純発想的な活動指向と、規範化を免れた、漂うような純粹精神性で女性を魅了する存在であることは述べた。彼の恋愛至上主義に多分の病理性を窺わせるものの、一人の中年男性として見ると新鮮な快男児的要素が強調されてもいる。そもそも彼のモラトリアム性を保障するものは、義務観念や帰属意識から解かれた、生き活きとした、老いを知らぬ精神的エネルギーなのである。潑刺とした若さを確信するからこそ、逆に「したいことをし、他人の言うことはこれっぽっちも気にせず、ひどく大きな期待もせずに行き来する能力」(177) を備えた、社会的自己定義を先延しした万年青年でいられる。Peter は53才になった今も、「自分は年などっていない。固まってもいないし、千涸びてもいない」(56) と高らかに宣言して憚らない。「まるで彼の未来が、元気一杯終ることを知らぬげに彼の方に転がって来た」(56) かの様に、ホワイトホールの通りを意気揚々と闊歩する姿や、ビクトリア街を歩いていて、飾り窓に映る自分の姿に見惚れて思わずうっとりする図は、さしずめ滑稽な道化者である。自分だけは若いと思い、それだけを己の拠り所にする楽天性。話しかける勇気もなく、ただ美人の後をつけて気晴らしをただけなのに、「向こう見ずの冒険家だ。敏直で、勇敢で、全くロマンチックな海賊だ」(60) と自負する、馬鹿馬鹿し

い程に高揚した自我意識。だが、この年になって「せいぜい年取500ポンドほどにしかならない」(83) ような、少年にラテン語を教える助教師の口か、上司にあごで使われる役所勤めの口を、頭を下げて旧友たちに頼み歩かねばならない屈辱的な現実との惨めな落差。内に秘めた生命エネルギーは人一倍の量なのに、現実世界との軋轢のためにすぐに失速状態に陥り、やがて墜落してしまうのだ。

長い人生サイクルから見ると、Peter は周期的に浮き上がっては沈み、又浮き上がっては沈むという、「上昇-落下」を繰り返す典型的な「永遠の少年」(pure aeternus) の元型に支配されている。未熟なペルソナ、自分の特別な才能への自惚れ、その才能を認めない社会・世間が悪いのだとする他責傾向、現実にしっかりと根をおろして真の交友関係を築こうとしない孤独癖、何事も長続きしない忍耐力の欠如など、どれもその元型に符号する要素である。しかも「永遠の少年」は人間的成長を遂げて成人することがない。53才までモラトリアムにどっぷり漬っているという意味では、未完結性こそが Peter の最大の特徴となっている。現実社会では繰り返しの挫折が運命付けられていて、その度毎に一切を中途放棄して太母の子宮への回帰衝動により突然の落下をしてしまう。母親との心理的癒着傾向の強さはすでに指摘したが、Peter の場合、文明の地ロンドンで夢破れると、すぐに(母の待つ)辺境の地インドに逃げ帰るといふ、意識世界から無意識世界への退行・逃避の空間移動パターンが暗示されているも考慮されて然るべきであろう。

「永遠の少年」の元型に支配されたドン・ファン Peter は、自己存在の矛盾を曝け出し、人生の落伍者ぶりを発揮して皆の失笑を買う一方で、日常価値を逆転するような透徹した批判精神を披瀝することでも、道化としての機能を果たしている。その際先ずその男性的攻撃性の色合いを帯びた批評眼が向けられるのが、例えば彼を心の中で密かに馬鹿にしている同性の男性たちである。良識と善意の政治家、Richard Dalloway のお上品ぶった為政者の論理や、正義感を気取った愚直な体質を嘲笑い、或いは、宮廷勤めの旧知の Sir Hugh Whitbread に至っては、徹底的に彼の鼻もちならぬ貴族趣味と軽薄極りない俗物根性を扱き下ろすといった具合である。当然のことながら彼の批判の目は Clarissa にも向けられて、彼女の snob としての正体を暴く。Clarissa が社会的自我を肥大化させ、母性的配慮に満ちた社交婦人としての人望を集める一方で、若い頃の自由闊達で豊潤とした精神性を失い内的自我を枯渇させて、次第に「ますますいららし、ますます心動揺させている」(46)、いわば更年期うつ病様の葛藤状態に陥っていることを見抜くのである。夫の世俗的価値観に順応しすぎてパーティの成功にのみ腐心をする Clarissa の、自己欺瞞的な上流志向の人生態度を揶揄するのだ。反秩序性、反道徳性を旨とする道化の批判精神は、さらに社会告発へと向う。彼は銃を背負って行進する能面の少年兵たちを見て、個人の意志を踏躪り、愛国戦没者の美名のもと死へと駆り立てて安泰をはかる国家や文明の非道な仕打ちを憤り、又、それを見て見ぬふりをする、自律機能を失った仮死状態にある民衆世論の墮落ぶりも痛烈に非難するのだ。

抜群の身軽さと奇抜な行動力、それに芸術家のような水々しい感性で、周囲の人々を騒動の中に巻き込み、そうすることで彼らの心を触発して活性化させる働きをするのも道化である。

「永遠の少年」の元型を宿す Peter の本領が活かされる、救済者としての道化の側面である。本人にその自覚がないままに、周囲に日常価値逆転の化学反応の連鎖を引き起す触媒としての重要機能を果たするのである。Peter 自身は矛盾や欠陥に満ちた存在で、同情や嘲笑、稀には、憧憬の対象ともなるのだが、彼には人間存在の悲哀を語り、人生の真実を垣間見せる役割も小説の中では課せられているといえよう。

Peter が Clarissa を訪問する場面をもう一度例にとろう。まるで異次元空間からやって来た侵入者のように、彼は、女中を押しつけて階段を駆け登り、Clarissa が銀緑色の夜会服を纏っている（それは彼女にとっては人生の秘儀の営みを意味する）屋根裏部屋に闖入する。夫の Richard でさえ容易に出入りできぬ彼女だけの安息の寝室であるのに、霊的存在たる道化役の Peter だからこそ母親の懐に飛び込む屈託のなさで、いとも容易にできる芸当だったのだ。

「自分がたったひとりで生きていて、誰にも知られずにいる」(58) という無名性の不思議な確信が、彼の神出鬼没の身軽さを保障する。元来王の傍に侍る道化には常に無礼講が許されるのだ。そして Peter は Clarissa の堅固な社会的自我の殻も容易につき破り、抑圧されていた彼女の内的自我を呼び覚まして、互いに真情を吐露し合う声なき会話を交わすのだ。現実世界の柵しがらみの中で身動きできずにいた彼女を救出し、現実離脱の空中遊泳ともいべき思い出の幻想体験に誘うのである。そして「Peter と駆落ちし、彼と同棲する」(53) という、彼女が生きられなかったもうひとつの人生（叶わぬ夢）が織り込まれた5幕物の劇を見させる。Clarissa は登場人物として演技する舞台の自分を、こちら側の観客席から見るといって、いわば二重身体験でカタルシス効果にも似た魂の浄化・癒しを受けるのである。

喜劇的道化性やドン・ファン的楽天性は、道化役の孤独な影があって、なお引き立つ。逆に、周囲の人々の心を和ませ失笑させるといって、外向けのピエロ性の演出効果があってこそ、裏に隠された Peter の孤独感、悲哀感が浮かび上がるのだ。現実世界ではあくまで Peter は孤立無援の悲しい身の上である。彼の陽気で快活な仮面を剥ぐと、その裏に緊張した、怯えた素顔が覗く。人生の節目節目で、彼は仮面を取り真顔を見せて、人生に真正面から真剣に立ち向おうとして、結局あの Clarissa との失恋体験のように大いなる失意の挫折を味わされる。新しい事業や冒険に取り組む毎に、挫折の繰り返しであったと言える。「永遠の少年」の悲劇性は、内に秘めた活力が喜劇的に空回りの失速状態を起すことをつい忘れて、己に課せられた人生の演出家としてのトリックスターの使命を放棄し、夢中になって自ら人生の主人公になろうとする時に生まれるのだ。道化は道化でいる限り身の安全は確保されるのにである。

己の発狂の自殺によって、逆に文明や社会の不条理な暴力性を激しく告発した Septimus Warren Smith とは違って、Peter Walsh はあくまでも「生」の側に踏み止まり、欠陥多き滑稽な道化役を演じながら、軽妙に喜劇的人生を生きて見せる。二人の生死を決したのは、さしずめ神経症と精神分裂病の違いであった。又、同じ「生」に与する仲間でありながら、Clarissa Dalloway が人身御供として我が身を「人生」の祭壇に捧げる気概を示すのに反して、Peter は内に秘めた生命エネルギーを拗り所に、現実逃避的に恋に執着する哀れな人生の落伍者である。しかしながら、彼が滑稽なドン・ファンぶりを発揮してまで我々に訴えようとするのは、消極的な責任回避としての現実逃避ではなく、一旦社会や文明から身を離し、従容として孤独に耐えつつ自由放縦な知性と感性を確保した上で、人間存在や時代状況を見据えること——その視座の必要性であろうか。第一次大戦の衝撃が、V. Woolf を含む当時の知識人に与えた心理的空隙や神経症的混乱を考えた場合、1925年発表のこの小説に登場する Peter Walsh には、心の健全さを測る尺度としての、時代を先取るモラトリアム性が与えられているように思える。愛すべき幼稚さや未熟さを宿すからこそ、心が健全であるという逆説が生きておきたいのである。



## 註

『ダロウェイ夫人』のテキストは *Mrs. Dalloway* (London: The Hogarth Press, 1968) を使用した。作品中より引用する場合は、括弧内の数字によってその引用頁を示す。

- 1) 拙稿「中年女性のための鎮魂曲—『ダロウェイ夫人』の心理学的考察—」, 1989, 名古屋女子大学紀要 第三十五号 (人文・社会編) 所収。
- 2) 「モラトリアム」の概念については、参考文献3)~6)を、又、「永遠の少年」については、同1)と8)~11)を主に参考にした。

## 参 考 文 献

- 1) フォン・フランス著, 松代洋一(他)訳『永遠の少年』紀伊国屋書店, 1983
- 2) 秋山さと子『聖なる男女—深層への旅—』青土社, 1982
- 3) 小比木啓吾『モラトリアム人間の心理構造』中央公論社, 1980
- 4) 同 『現代人の心をさぐる—よりよい精神生活のために』朝日出版社, 1986
- 5) 同 『現代人の心理構造』NHKブックス, 1989
- 6) 同 『自己愛人間』朝日出版社, 1981
- 7) 平井富雄監修『現代人の心理と病理』サイエンス社, 1987
- 8) 河合隼雄『生と死の接点』岩波書店, 1989
- 9) 同 『人間の深層にひそむもの—大人と子供の心理療法—』大和書房, 1982
- 10) 同 『母性社会日本の病理』中央公論社, 1976
- 11) 同 『昔話の深層』福音館書店, 1981
- 12) 栗原彬『やさしさのゆくえ—現代青年論』筑摩書房, 1981
- 13) 山田和夫『成熟拒否』新曜社, 1983
- 14) 同 『エロスなき母子癒着の病理』大和出版, 1988
- 15) 稲村博『若者・アパシーの時代—急増する無気力とその背景—』NHKブックス, 1989
- 16) Alex Zwerdling, *Virginia Woolf and the Real World*. Berkery: Univ. of California Press, 1986.
- 17) Lupio P. Ruotolo, *The Interrupted Moment: A View of Virginia Woolf's Novels*. Stanford: Stanford Univ. Press, 1986.
- 18) Louis A. Poresky, *The Elusive Self: Psyche and Spirit in Virginia Woolf's Novels*. Newark: Univ. of Delaware Press, 1981.